

秋まき小麦の止葉期以降の追肥の考え方

1. 秋まき小麦の生育状況（6月1日現在）見込み

平年と比べて、高温で経過しているものの、寡照の影響により、平年並の生育となっています。ほ場を確認の上、適切な肥培管理に努めましょう。

表1 6月1日現在のきたほなみの生育状況（十勝農業改良普及センター本所）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	遅速	これまでの生育期節		
				起生期	幼穂形成期	止葉期
本年	65.1	1,061	±0	3月29日	4月29日	5月26日
平年	59.1	1,107		3月31日	5月1日	5月26日
前年	63.1	983	-3	3月29日	5月4日	5月30日

2. 止葉期以降の追肥の考え方について

止葉期以降の追肥は、止葉期の上位茎数と目標収量（720kg/10a）を指標とします（図1）。

(1) 止葉期の管理：倒伏や遅れ穂の発生を避けるため、窒素追肥量は4kg/10aを上限として実施。

上位茎数 900 本/m² 以上の場合：止葉期の追肥は控え、開花期の追肥を検討。

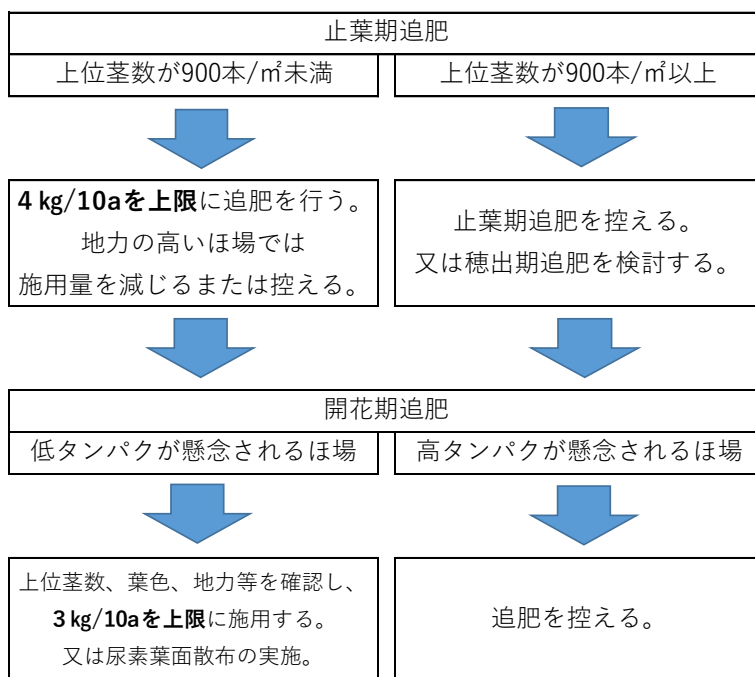
上位茎数 900 本/m² 未満の場合：窒素追肥量を4kg/10aを上限として実施し、開花期の追肥を検討。

(2) 出穂期の管理：遅れ穂の発生や高タンパクを避けるため、窒素追肥量は3kg/10aを上限として実施。

高タンパクが懸念されるほ場：開花期の追肥を控える。

低タンパクが懸念されるほ場：開花期の追肥または葉面散布を検討。

※止葉期の上位茎数とは、止葉期における最上位展開葉の葉耳高が10cm以上の茎を「上位茎」とし、10cm未満を「下位茎」として区別するものです（写真）。



写真

止葉期の上位茎（左：葉耳高10cm以上）

と下位茎（右：同10cm未満）の区別

（▶ は止葉の葉耳を示す）

図1 秋まき小麦の止葉期以降の追肥の考え方